

第50回記念企画

OBOG ジョイントセミナー & パネルディスカッション

世代を超えて考える

「今、私たちに求められているものとは？」

あなたにとって研究とは何ですか？ オリジナリティとは何でしょう？

生命科学の発展は日進月歩です。新技術の開発はとどまることなく、次々と新しい知見が得られています。Web には膨大な数の論文が公開され、自らの新規性を確認するだけでも一苦勞です。似たようなことを考えている科学者が、他にもたくさんいるかもしれません。そのような時代にあって、独自の研究を創成していくためには、どういったアプローチ・姿勢が有効なのでしょう。

本企画の目的は、一流研究者として活躍されている先生方と共に、過去の事例を振り返りながら、「今、私たち若い研究者に求められているもの」を皆で真剣に考えることです。その答えは、具体的な実務能力、あるいは抽象的な生き様として表現されるものかもしれません。しかし、必ずや皆様一人ひとりの心に響く何かは沸きあがることでしょう。私たちはそう信じています。

本企画では、若き日に夏の学校を盛り上げた OBOG の先生方にご講演いただきます。熱い議論を通じて、世代を超えて受け継がれるものがあれば、企画者としてこの上ない幸せです。是非、ご参加ください。

オーガナイザー：豊田 優 (東京工業大学)、伊藤 真理子 (兵庫県立大学)

ジョイントセミナー

1Q89 その時年長組が動いた

講師略歴

1982年 東京大学大学院工学研究科化学工学専攻修士及び博士課程在学。
 ~ 1987年 博士課程では、自治医科大学に居候し、F1-ATPaseの研究を行う。
 1987年 旭硝子株式会社 中央研究所研究員
 1991年 理化学研究所研究員
 1998年 東京農工大学工学部生命工学科 助教授
 2003年 東京農工大学大学院 教授（現職）



1984 ~ 1985 センター事務局長、年長組総務部長

養王田正文 先生



19 年 東大大学院薬学系研究科修了、薬学博士
 1992年 渡米、テキサス大学 MD アンダーソン癌センター博士研究員
 1998年 米国国立衛生科学研究所環境衛生科学研究所生殖発生毒性学研究部 門室長
 2008年 ミシガン大学歯学部生命材料学科准教授

三品裕司 先生

1983 ~ 1984 関東支部長、年長組組長

1 Q 80 年代、既にその存在意義を失いつつあった生化若手の会。その一方で、革命とも言える分子生物学の進歩によるバイオブームの中、夏の学校は繁栄を極めていた。しかし、その繁栄もバブル経済と同じように空洞化が進んでいた。1 Q 80 年台後半、それまで生化若手を支えていた重鎮たちが若手の会を去り、生化若手のシンボルであった夏の学校のシンポジウムの企画が困難になり、危機が顕在化した。そして、その時年長組が動いた。年長組とは、1 Q 83 年度関東支部長だった三品裕司たちを中心としたグループである。メンバーは、組長の三品の他、人事部長こと福地清、秘書の細川啓、総務部長の養王田正文の4人であった。彼らは既に若手の会のメインの活動からは離れていたが、再度結集し、平成元年である1 Q 89年に霧ヶ峰で行われた第29回夏の学校において、シンポジウム“がんばれ日本・・・日本の科学の明日はどっちだ?! あしたのために その1その2その3”を企画した。その後、調子に乗った彼らは、1Q92年にも“研究成功のカギを探る —プロジェクトのひ・み・つ—”を企画している。これらの夏の学校から、若手の会が活力を取り戻し、その後の若手の活動を支える人材が育ち、生化若手の新時代がスタートした。

本企画では、この生化若手の平成維新を振り返り、当時の我々のメッセージに20年間の自身の体験を加味し、元気を失いつつある日本とそれを支える若手へ再度伝えたいと考えている。そのメッセージとは。2回のシンポジウムの企画趣旨の抜粋を以下に紹介する。皆様の積極的参加と議論を期待しています。

当時のシンポジウム要旨

“がんばれ日本・・・ 日本の科学のあしたはどっちだ?! あしたのために

その1 その2 その3”

前略

しかしながら、欧米に渡った日本人がそこでいい仕事をしている例はたくさんあるわけで、決して大和民族がScienceに向かないわけではなさそうです。どうも研究をする環境の違いに秘密がありそうです。もしかしたら研究費の額が多いのかもしれませんが。大学は日本の講座制と同じ体制なのでしょうか。学生はどんな教育を受けているのでしょうか。テーマはどのように決まっているのでしょうか。

中略

そこでシンポジウムでは、海外経験の豊富な方々を講師に迎え、欧米の研究システムを紹介していただくことにしました。日本と欧米の比較によって、「日本の研究者」と「日本の研究環境」の問題点を明らかにしていきたいと考えています。

“研究成功のカギを探る —プロジェクトのひ・み・つ—”

前略

さて、日本でもただ乗り批判に応えるべく、基礎研究に対する貢献策としてヒューマンサイエンスプログラムやヒトゲノムプロジェクトといったビックプロジェクトが開始され、莫大な研究費が投資されはじめました。

中略

これらのプロジェクトの成功は日本の研究環境の改革につながることを期待されます。そのためには、若い研究者のプロジェクトへの積極的な参加が不可欠です。しかしながら、プロジェクトの意義や内容が若手研究者に十分伝わっていないことが現実です。

後略

若手へのメッセージ

年長組を当時活躍した若手の会のメンバーは、若手の会の活動から離れた今でも友人として交流しています。生化若手の会は大学や組織の枠を越えた真の友人が得られる数少ない場所だと思います。皆様も生化若手の会の活動を通じて、人脈を広げてください。